

Title	日本のバイオインダストリーの構造変化
Sub Title	
Author	伊藤晴通(Itou, Harumichi) 小野桂之介
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	1991
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 1991年度経営学 第814号 複写許諾が必要
Genre	Thesis or Dissertation
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00001991-0814">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00001991-0814</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

学生氏名 伊藤 晴通 主査 小野桂之介  
副査 藤枝 省人  
古川 公成  
所属 小野桂之介 研究室

## 日本のバイオインダストリーの構造変化

近年の技術革新の加速化、情報の多様化とそれに対応する市場の細分化は、様々な産業において進化の方向性や発展性に影響を及ぼしている。本研究の基本的な目的は、二十一世紀を担う革新技術の一つと見られているバイオテクノロジーが、わが国の既存の産業に対しこれまで影響を及ぼしてきた過程を分析し、さらに今後どの様な影響を与えていくのかを展望することにある。本研究では、また、そこで示唆される動向がバイオテクノロジーを用いて事業活動を行っている企業の経営にどの様な意味を持つかという点についても若干の考察を加えた。

上記の観点から本研究では、1) バイオテクノロジーを用いて事業活動を行っている企業の業種や規模、2) 実際に研究開発と事業化の対象にされてきた主要技術の構成、3) 開発された製品が供給される対象市場という3つの視点から、各企業の研究開発テーマをデータベースとした実証分析を行った。

研究テーマの基本的な性格を特徴づける因子を1) 企業業種、2) 企業規模、3) 技術取得手段、4) 開発利用技術、5) 技術適用領域、6) 応用事業分野、7) 開発製品適用分野と設定し、これらの切口からこれまでの実態推移を分析した。研究テーマは、これまでに日経バイオテクなどに公表された情報を中心に、1100件程集計し、データベースとして用いた。分析は大きく2つに分けられ、(1) 研究テーマの開発状況(時期、開発段階など)が異なるものを一つの母集団としてまとめ、各7つの因子の特徴とその相互関連の特徴を分析する総轄分析と(2) 過去10年間の経時変化を7つの因子の各側面から捉えた時系列分析を行った。

分析の結果、参入企業の特徴という面では、初期に多かった中小規模の食品業種は減少し、大規模企業の参入比率が上昇する傾向が認められた。また、バイオテクノロジーを構成する中核技術という面では、これまで醸造分野などで利用されてきた古いバイオテクノロジーと技術的連続性の強いと考えられるバイオリアクター技術は減少し、技術革新性の高い遺伝子操作技術関連の研究テーマの比率が増加してきた。一方、開発された製品の市場という面では、診断薬、医薬、食品、農業関連が多く、今後もこの分野の展開が予想される。